

(1) 基本的に

病を急性期の発作と慢性期の未病に分けたら、カゼは、最も典型的で一般的な発作。

それで、体調が悪くなったり、体が歪んだりしたときには、カゼを引くことが多くなる。捻挫や打撲した後にカゼを引くこともよくある。カゼという発作を起こすことで、体調を改善し、歪みを元に戻していると考えられる。

症状としては、肩胛骨鎖骨から上の表位と、胸内部の上焦で、邪が盛んに動いていて、熱が出る。表位は、太陽位とも呼ばれ、上気道炎であるカゼの症状が上気道が通る部分の体表に現れる場所で、昔から診断に使われてきた。また、中焦や下焦など下半身は冷えていて、中焦には水毒、下焦は虚が多い。

治療としては、表位上焦の邪気を引き出すことが中心。また、大椎から肩甲間部に手平を入れて汗ばんでいなければ「無汗」と言い、邪が表位から出にくい状態。この場合は、表位から発汗を促していく。

カゼも長引くと、体の横側にもツボが出る傷寒論の少陽病になり、慢性期的な配慮も必要。少陽病になる前に対処したい。

(2) ツボの出やすい所

1. 表位上焦など

後頸部や肩背など表位（太陽位）の中でも、大椎の周りや、喉（前頸部）や鎖骨や胸上部などの前側。胸の辺りは、膈中横の胸骨間から中府に向かって肋骨を1本上がるたびに外寄りにツボが出る。痰が切れにくいときには、鎖骨の下側（胸側）に筋張りが出ていることが多い。

2. 1. と経絡的に関連する所

逆上せや前頭部痛があれば、手陽明の合谷やなど。大椎の周りの強張りや発熱では、手太陽の後溪や隣の中渚など。喉や胸の付近の急性症状を反映して、手太陰の列缺など。

咳が長引いたときには、上腕の上尺沢。下半身の冷えを反映して、足甲3-4間。喉が痛いときには、土踏まずの然谷など、足少陰の足首から先を使い、灸では然谷や節紋、鍼では照海や大鐘。

3. 腹など1. 以外の胴体

長引いたときで水毒が関係している場合には、背の7-9-11付近の華陀経に冷えているツボを探す。そのツボに深く刺し、しばらく留め、気を巡らす「補の刺法」を使う。

(3) 手順

1. 急性

急性期でも症状が落ち着いていれば、表位や上焦の邪を出した後に、冷えに灸。腹の処置はしない方がよいことが多い。

i. 仰向けで、合谷などに引いたあと陰経の列缺など、陽経の外関などの順で引く。照海・大鐘や足甲など足の陰陽に引く。足陰陽は灸で対応する場合には省略。

ii. うつ伏せは、急性期は省略することが多い。

iii. 座位で、後頸部・肩背の熱い所に散鍼した後に、大椎の周りなど凝っている所に刺鍼。その後に、喉、鎖骨、胸など前側に移り、熱い所に散鍼してから、痼りがあれば刺鍼。後始末として、頭に散鍼した後に、手甲に引き鍼。

iv. 然谷など足少陰、足甲3-4間の順で灸。施灸後に逆上せが再発したら、手骨空に糸状灸して仕上げる。

※症状が盛んで座位が無理なとき

仰向けのとときに手への引き鍼の後に、喉・鎖骨・胸を刺鍼。うつ伏せで、肩背・後頸部を刺鍼。そのまま、頭の散鍼をして、手甲に引く。

2. 長引いた場合など慢性期

長引いた場合には、ツボを考慮して慢性期の型で刺鍼した後に、然谷や足甲3-4間などに灸。

中焦の水毒や下焦の虚への対策や、少陽病対策としての体側面のツボへの処置などが必要になる。

(4) 漢方薬病証から鍼灸手順

カゼの漢方薬の病証を丁寧に学ぶ。そして、いつかは、漢方薬の病証からも、鍼灸手順を導けるようになっていよう。『薬徴』や『類聚方』を手掛かりにしながら。

要点

- ① カゼは、最も典型的で一般的な発作
- ② 表位で蠢く邪を引き出す（無汗なら発汗）
- ③ カゼかなのときに、熱い汁物などで自己養生